

話・言葉

相手を知る

「話」という言葉の示す意味は実に多種多様である。「これこれ話をしちゃいかん」という場合の話は、多分教室で生徒がとなり同志、何かさゝやき合っているのであろう。

「ちょっと君に話がある」というときの話は、何かいやなことをきかされそうである。「いい話がある」といわれると、縁談か金もうけの相談のような気がする。

「これから公会堂へ話をききに行く」というときの話は、講演、演説の類であろう。「さあ、お話して上げよう」という先生の言葉に、小さい子どもたちは、すぐに話を童話と合点して、心をおどらせるのである。

檜 葉 勇

う。

このように話は、その目的、内容、形態など、いろいろちがっているのであるが、どの話にも共通する条件は、必ず相手があるということである。相手のないおしゃべりは、ひとりごとであって、普通話とはいわない。したがって、すべての話は、先ず相手を知ることが、話以前の最も重要な仕事である。

農家が作物を栽培するときは、前以てその作物について充分の知識を持たねばならないのと同様である。もし作物についての知識を有せず、暖地に適する作物を、寒冷地に栽培すれば失敗するにきまっている。

話の場合、一対一の対談の外は、相手は複数であることが普通であるから、その一人々々、ちがった人間

である。しかし一ヶ所を集ると、そこに何か共通性が生れて来る。それをつかんでおくことが、話を生かすか否かの第一の関門である。これはきわめて分りきったことであるが、存外おろそかにされていることが多い。では相手について、どんなことを考慮するのか、平凡なことであるがあげてみよう。

一年令

年令といっても、きわめて大ざっぱに、若い人か老年者か、成人か子どもかという程度の分類でよいと思う。

二性別

三数

同じ内容の話であっても、受ける人数の多少によって、反響がちがって来る。たとえば数が多くても、着席の間隔が大きい場合には、多数としての反響がない。

集りが多い予想で出かけた会合が、意外に少なくて面喰うことがよくある。そんな場合には会場を変更す

るとか、集り方をかえるとか、少人数に適應する態勢をととのえるべきである。少数の聴衆に対し、多人数の場合と同じ型の大演説をぶつのは、むしろ滑稽である。

会場等変更困難な場合には、話の仕方に工夫あるべきである。私は百人ぐらいと予想される会合に出かけたところが、あいにく天候がわるかったため、わずか数名の出席に過ぎない。話すものも、聴く者も氣抜けして、しょんぼりしている。これではいけないと思った私は、最初にこんな話をした。

「アメリカにピーチャーという伝導師があつたが、ある会合に招かれて出かけた。ところがひどいあらしであつたので、主催者は、

「せっかくおいで下さったが、この天候でだれも集りません」と恐縮していいわけすると、師は「ひとりも見えておりませんか。」と尋ねた。

「いえ、たったひとりだけ出席しております。」すると師は急に目をかがやかせ、

「よろしい、そのひとりにお話ししよう」といっ

て、たったひとりに対し、全心全霊をこめて熱弁をふるった。その話をきいたたったひとりが、師から受けた大きな感動を、自分の胸にしまっておくことが出来ず家族に伝え、友人に伝えたが、伝えられた人々は更に自分の周囲の人々の魂をゆり動かした。ピーチャー先生の相手は只ひとりであったが、今日ここには、数人の方々が見えている。この悪天候にこれだけお見え下さったのだから、私はピーチャー先生よりはるかに張合いがある。ただ私はピーチャー先生のようなすばらしいお話が出来ないのが残念であるが。

四 知的水準

いいかえると、自分の話を、どこまで受け容れ、理解してくれるかということである。それには職業も大いに関係する。農家の人々には、農業関係の話はよく理解されるであろうが、いきなり国際問題を持ちだしても、おいそれと受け容れてはくれないであ

ろう。

五 環境

テレビの「ふるさとのうたまつり」で、誰も感じることは、宮田アナウンサーが、開催地の地理、歴史、伝説、民謡など、土地の住民以上にくわしいことであろう。宮田氏がいくら博覧、強記でも、全国各地をもとよく知っているというわけではあるまい。開催地が予定されると、事前によく調査されているにちがいない。

そのように相手となるべき人々の環境をよく知っておくことは、適切な話を構成する上に必要なばかりでなく、相手の心をつかまえる秘訣である。宮田氏がその土地の神社やお寺を持ちだすと、それだけで何ともいえぬ親しみをおぼえ、会場がたのしい和やかな雰囲気包まれる。

六 雑多な相手

話の相手が学校の学生生徒、特定の団体などでは、比較的つづがそろっているが、その他一般の会合で

は、種々雑多の集合であることが多い。

百人の人々が集っているとすると、百人が百人とも別々の人間であって、年も境遇も思想も趣味も、みんなちがっているであろう。ある人は家に残した子どものことを思い浮べているかも知れないし、ある人は、帰途の買物を考えているかも知れない。しかし、一同に会しているからには、何か共通的な心のはたらきがあると思われる。

「どうしてこんなに集りがわるいのだろう」

「とつくに開会時刻が過ぎていくのに、まだはじまらないか」

「今の若い者の行いがよくない、困ったものだが、今日はその問題についてききたいものだ。」

など、みんなに共通する心の状態が生れる。その共通心理をつかむことである。

たとえば、ある会合で、二人の講師が長広舌をふるったそのあと、私が登壇したとする。そのとき聴衆は、「こんども有益な話をきくことが出来るぞ。」

と期待するだろうか。

会の性質にもよるであろうが、「この上また長い話をきかされてはたまらないぞ。」

「早く終わってもらいたいものだ」という気持が共同的に生れるのではあるまいか。

そのとき

「只今二人の講師から有益なお話がありました、そのあとを受けて、私もいささか所懐をのべて見たいと存じます。」などと切りだしたら、「また長いようだぞ」とうんざりして、席を立つか、居眠りの用意をするかも知れない。だがもし私が

「さきほどからお二人の先生の詳細なお話がありましたので、私の申上げる必要がなくなりましたが、ほんの責ふさぎに日ごろ考えておりますことの一端を申上げて失礼いたしたいと存じます」という話の出版をしたら、

「やれやれ、こんどは短かいようだ。それじゃ終りまできくことにしよう。」と姿勢を正して耳を傾けて

くれるであろう。そのあと私の話し方次第では、さっきの約束を忘れて、かなり長い時間聴衆の心をつなぐことが出来るであろう。

最初の三分間

話は最初の三分間で勝負がきまるといっても、いい過ぎではないであろう。もちろん最初は、いかにもたどたどしい話し振りで、内容もつまらないと思われたのに、次第に熱をおび、人の魂をゆり動かすような名講演となることも、決してないとはいえないが、それは特殊な例である。

普通は最初の三分間に、「わかりそうだ」「おもしろそうだ」「ためになる話のようだ」などの印象をきき手に与え、きき手に期待を持たせることが、話を成功にみちびく第一歩である。反対に、

「さっぱりわかりそうにない」「つまらない話のようだ」などの印象を与えれば、きき手は最初から逃げてしまう。

最初の一言で、もっともつまらないのは、何かいいわけを述べることである。

「実は昨晚不意の来客がありまして、おそくまでねばられましたので、お話の原稿をととのえることが出来ませんでした。したがって思いつきを申上げることと思いますが、おゆるしいただきたいと存じます。」

こんないいわけは、自分の不用意をさらけ出し、その不用意な話をきけというのだから、きき手をばかにした話である。

短かい話

「下手の長談義」という、長い話をいませめている言葉がある。実際短かい時間に、自分のいいたいことをまとめ、話の効果をあげることは、下手では出来ない芸である。

ところが、何かの会合であいさつを述べる場合、長々ととり止めもないことをしゃべって、終りの言葉がふるっている。

「甚だ簡単でございますが、これを以て私のごあいさつに代えさせていただきます。」

何が簡単だといったくなる。

私はこの「あいさつに代えさせていただきます。」とか「祝辞に代えさせていただきます」というのが、ふしぎでたまらない。ちゃんと祝辞を述べておきながら、おしまい「代えさせていただきます」は、おかしいと思う。祝辞の代りに、歌を詠んだとか、寸芸をやるとかならわかるが、祝辞そのものを述べておいて、祝辞に代えるのは滑稽のような気がするがどうであろう。

一つの会合で、多くの人々が話をする場合には、予め司会者から、許される時間を予告される場合が多い。そんなときには、たとえ話したいことが残っていても、時間を厳守すべきである。

話す時間を限定されなくても、自分のあとに出る人々の数を予想して、自分に与えられる時間を知るべきである。ところがかなり多数の人々が順次自己紹介を

するような場合、自分ひとりで、多くの時間を独占するのは、非常識きわまることである。

諸星竜氏の「三分間スピーチ」には、きき手の氣に入らない話として、次の五つをあげているが、この中にも時間が長いことがあげられている。

一 話し手の態度がわるい。

尊大だ、信用がおけない、きざっぱい
ほら吹きだ。

二 話の時間が長過ぎる。

三 話の仕方がまずい。声がききとりにくい。もたもたして論旨不明

四 話の内容がつまらない。

五 会場の雰囲気盛り上がらない。

右の第三番目に、話の仕方がまずいことがあげられているが、まずい話ができ手に喜ばれないことは当然である。したがって、上手な話が望ましいことはいうまでもない。しかしこの話の上手ということが曲者である。

普通には、立板に水の流暢な話し振りを、うまい話と思ひ勝ちであるが、能弁必らずしもりっぱな話とは限らない。却て訥弁の魅力もある。昔三宅雪嶺博士の講演をきいたことがあるが、所謂訥弁でよくききとれない。それなのに博士の講演が終ったときには、何かしら大きな感動をおぼえた。こうなると話術の末ではなく、偉大な人格、高い識見の致すところであろう。

話の言葉

話は言葉の組立てによって成立する。したがって、話す言葉の選択は、話を成功に導く鍵である。

ではどんな言葉がよいか、一概には決めかねるが、大久保忠利氏はその著「話のしかた」で、生き言葉の条件として、

- 1 正しく
- 2 わかりやすく
- 3 感じよく

の三つをあげているが、何人も異論がないであろう。

一 正しい言葉

文法にかなった言葉などというと、いかにも固苦しく、めんどろ臭いと感じる人が多いであろう。しかし我々の日本語が、他の人々に通じるのは、ひとりで文法の中で話されているからである。そこでもっとはっきりと文法意識を持って、話したり書いたりするところが望ましいのである。

二 わかりやすい言葉

わかりやすいといっても、きき手によることであつて、大学生には、いとわかりやすい話であっても、小中学生には理解出来ないことがあり、専門語になると、一部専門家には何でもないが、普通人にはさっぱりわからぬ言葉がある。

信州のある地で、農業関係の講演会があつた。講師は弁舌さわやかに、平易な言葉で興味深く話をすすめたので、聴衆は満足して、会場を出た。

ところがかえりの途中、二人のお百姓がこんなことを話していた。

「今日の話はなかなかよかったな」

「うん、だがどうしてあんなにドジョウのことばかりだったのかな。」

「そりやドジョウはたべたらうめえし、栄養もあるということさ。」

講師のいったドジョウは、もちろん土壌のことである。やさしく話したつもりでも、きき手によってはむずかしいのである。もしこの講師が

「ドジョウ、畑やたんぼの土のことですね。」というような言葉をはさんでいたら、魚のドジョウとまちがえられることもあるまい。

こんな滑稽なまちがいは、お百姓だから起ったのかと思ったら、こんな例もある。

大久保氏が東北の教員の国語教育研究会で

「一年生や二年生では、先ず一語文をやめさせ、ちゃんとした文で話すようにさせることが大切です」

と述べると、そのあとこんな奇妙な質問が出た。

「さっきイチゴ文とおっしゃったのは、越後の方言

のことですか。」

これはもう笑い事ではない。一語文というまでもなく、幼児の言語発達段階初期の言葉で、名詞一つで表現する。「オッパイ下さい」が「オッパイ！」だけで間に合わせる。

三 感じよい言葉

感じよい言葉で話すということは、つまりは話し手自身が感じよい人間となることである。それには常に相手の反応をよみ、話すことをたのしみ、相手とともに話を進めていくという態度がほしい。

感じよい言葉で、話し手もきき手も、ともに楽しむために、ユーモアのあることが望ましい。日本人の話は、一般にユーモアが乏しいといわれているが、ユーモアとは何か、しゃれとどのようにならっているのか、稿を改めて述べたい。